

トピックス 明けましておめでとうございます

本年も太極拳をきずなとして、またこの雲の手通信を通じて、よろしくお付き合いくださるようお願い申し上げます。

今年は、指導教室のひとつ、『瑞江鶴の会』が1月早々に30周年記念行事を行います。また、『亀戸スポーツセンター教室』が25周年を、そして私が当初から在籍する『清新鶴の会(指導・露澤徹師範)』も6月には25周年を迎えます。それぞれの会が、このように発展しながら継続してきているということは素晴らしいことだと思います。

申

さて、今年は申年です。「申(しん)」は、背骨と肋骨を表す象形文字、あるいは両手で物を伸ばす象形文字

【画像の左】が由来とされていますが、稲妻、雷(神鳴り)の象形文字から由来する

【画像の右】ともされています。漢和辞典での原義は「伸びる」です。

十二支は後に動物が割り当てられたということですが、ともあれ、申年のサルの写真をご紹介します。挨拶といたします。

【写真上；長野県・地獄谷野猿公苑 2015年5月写す】



協会ホームページがリニューアルされました！

昨年11月30日から、日本健康太極拳協会のホームページがリニューアルされました。カラフルで、動きのある画面になり、活字の大きさも選択できて読みやすくなりました。内容も刷新されて、どなたにでも、楊名時健康太極拳の素晴らしさがご理解いただけるようなコンテンツが載せられています。ぜひご覧になり、また活用してください。アドレスは； <http://www.taijiquan.or.jp/>

第17回太極拳祭、3月26日(土)に開催

中野完二先生一門による第17回太極拳祭が下記の通り開催されます。今回は同日に「江東区教室交流会」が計画されていますので、瑞江鶴の会を中心に参加いたします。

開催日時：2016年3月26日(土) 10:00~16:30

場所：台東区リバーサイドスポーツセンター体育館

参加費：3000円(Tシャツ、お弁当、お茶付き)

第2回江東区教室交流会、3月26日(土)に開催

第2回となる江東区教室交流会が計画されました。区内の楊名時健康太極拳教室12教室が集って楽しく交流する催しですが、今回はとくに東京都支部顧問の橋口澄子先生をお迎えしての特別研修会として設営されました。どなたでも参加できますので、橋口先生のご指導を受ける貴重なこの機会にぜひ、ふるってご参加ください。

日時；3月26日(土) 10時~12時 (受付；9時半から)

場所；豊洲シビックセンター(写真) 7階 レクホール メトロ有楽町線豊洲駅至近

参加費；1000円



昨年 11 月 28 日に奥多摩を歩く総勢 21 人の旅に行ってきました。これは私が代表幹事を務める『大江戸熱愛倶楽部』の本年度の研修旅行で、主たる目的は、御嶽神社を訪ね、その宿坊に泊まることにありました。

標高 929 メートルの御岳山の山頂に鎮座する御嶽神社の歴史は、神話時代、ヤマトタケルノミコトの東征を助けた「オオカミ」に由来しますが、その後修験道と習合して、中世以降は山岳信仰の霊場として発展、鎌倉時代には「金峰山蔵王権現」として、畠山重忠など関東の武将の尊崇を集めました。

江戸時代には、徳川家康から朱印地 30 石の寄進を受けて寺社奉行の管轄地となり、その後も綱吉の命による社殿造営などもあって庶民の人気が高まり、御師による御嶽講が江戸や関東各地で組織されるようになります。山上に数十軒の宿坊が立ち並ぶ、いわゆる山上集落の現在の姿が形成されました。明治維新によって神仏分離となり、改めて現在の御嶽神社となったわけです。

御嶽神社へは青梅線の御嶽駅で下車、バスでケーブル下まで行き、ケーブルカーで一気に 831 ㍎の山頂駅に着き、それから参道を約 20～30 分歩くと山上集落、小さな“仲見世通り”を経て、石段を 350 段上がると、やっと 929 ㍎の山頂にある神社に着きます。 **写真下；山上集落と御嶽神社(右上)遠望】**

この山上集落は江戸時代の初期にそこで修行していた山伏が定着して、その後御師となり、宿坊を営むようになったと言われています。現在 36 軒が宿坊や食堂、土産物店などを営み、総勢 150 人ほどが暮らしているそうです。たいへん結束が固く、独特の習慣、約束ごとを守っているようですが、例えば、嫁と婿は必ず下界から取るという風習をしっかりと継承して近親結婚による弊害を防いでいるということもその一例です。



泊まったのは、天明 8 年創業の御嶽山荘。御嶽神社の神職でもある宿坊のご主人ご夫婦以下 3 世代のご家

族によるたいへんアットホームなサービスで、手造りのこんにやくやごま豆腐、自家菜園の野菜などなど、質素ではありますが、とてもおいしく一同大満足、銘酒澤之井を 3 升も空けてしまいました。

翌日は溪谷沿いの澤之井ガーデンでまた利き酒。さらに足を延ばして東青梅の古刹「塩船観音」(つづじの名所)を回って帰京しました。

さこうべん
左顧右眄 (再開)

【第 17 話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

第 17 回 名句・名吟の詩人たち～その 1

この漢詩シリーズ 17 回目の今回、どなたでも聞いたことのある漢詩をご紹介しながら、作者の逸話にも触れたいと思います。今まで取り上げてこなかった詩人を中心に構成しました。

まずは、「項羽 (前 232～202)」からです。彼は「劉邦」とともに秦王朝打倒のためにともに戦ったのですが、最後には劉邦と覇を争って負けてしまいます。垓下(がいか・安徽省)で劉邦側の大軍に囲まれて負けを悟ったときに詠ったのがこの『垓下歌』です。敵陣から懐かしい故郷の楚の歌が湧き上がるのを聴いて大いに驚き落胆したところから、「四面楚歌」という熟語が生まれました。

愛妃「虞美人」を愛しむ切々たる思いが込められていますが、この後「虞美人」は潔く自害したとき

れています。項羽はいったんは敵陣を突破して逃れますが、結局は逃れきれずに自ら首をはねて死にます。若干 30 歳の最後でした。

ここから約 1000 年経った唐の時代に、詩人杜牧が、項羽の最後を惜しみ、何とか再起をはかればよかったのという想いで『題烏江亭』という詩を詠みましたが、その結句が「捲土重来いまだ知るべからず」です。それからこの四文字熟語も有名になったと言われています。

垓下歌

力拔山兮氣蓋世
時不利兮騅不逝
騅不逝兮奈若何
虞兮虞兮奈若何

垓下の歌

力は山を抜き氣世を蓋う
時利あらず騅(すい)逝かず
騅逝かざれば若(なんじ)を奈何せん
虞や虞や若を奈何せん

項羽

かつては力も氣概もあつたが
今や時は味方せず愛馬の騅も進もうとしない
騅が進まなければお前をどうするのか
虞よ、虞よ、お前をどうすればよいのか

次にご紹介するのは、北宋の政治家・書家・詩人の「蘇軾・蘇東坡(1036~1101)」の“春宵一刻直千金”で有名な『春夜』です。蘇軾は若くして進士に合格し、のちに皇帝に仕えて政治家として活躍しますが、王安石の改革派と対立して、罪を着せられて湖北省の黄州へ流されて、自ら百姓仕事をするほど苦勞します。その時工夫した安



価な豚肉を使った料理が、のちの名菜「東坡肉(トーロンポウ)」です。また宋の四大書家としても有名な彼がこの苦難の時代を詠み、かつ書にした「黄州寒食」詩巻は、名筆として現代に伝えられています。

「東坡肉(トーロンポウ)」は現在杭州の名物として有名ですが、それは彼が2度目の左遷で浙江省の杭州知事に在職したときに広めたものと言われています。彼が西湖の治水のために築いた蘇堤【写真上；1987年4月撮影】は今でも観光名所のひとつ、また住民の散歩コースでもあります。

その後中央へ復歸するのですが、また左遷されてはるか海南島に流されます。ようやく罪を解かれて都に帰る途上客死してしまいます。

春夜

春宵一刻直千金
花有清香月有陰
歌管樓台声細々
鞦韆院落夜沈沈

春夜

春宵一刻直千金
花に清香有り月に陰有り
歌管樓台 声細々
鞦韆院落 夜沈沈

直：あたい・値するの意

歌管；歌や管弦 樓台；高殿

鞦韆；ぶらんこ 院落；中庭

同じ宋時代でも、時代が下って南宋の詩人、というよりも哲学者・朱子として有名な「朱熹(1130~1200)」の代表作『偶成』です。朱熹は北宋の儒家、哲学者の周敦易、程顥らの学説を集大成して易学に儒学・仏教の考えも入れて、新しい解釈を樹立しました。「理学」「性理学」と言いますが、むしろ「朱子学」として日本では有名です。哲学者らしい真面目な詩ですが、古今東西、人口に膾炙^{かいしや}している名句です。

偶成*

少年易老学難成
一寸光陰不可輕
未覚池塘春草夢
階前梧葉已秋声

偶成

少年老い易く 学成り難し
一寸の光陰 軽んずべからず
未だ覚めず 池塘春草*の夢
階前の梧*葉 すでに秋声

*偶成；思いつき、またそのようにして出来た即興作品

*古詩にある名句の引用

*梧桐・おおぎり

遊印遊語 とうきんぼく 鄧散木を摸刻する

【2006年3月第22号】

この印は中国の文人「鄧散木」の印を摸刻したものです。『帝、少を好めば、臣、すでに老ゆ』と読みます。“私が若いときの皇帝は老人を重用した。今の皇帝は若い人を好むが、私はすでに老いてしまった”という意味です。世の中はなかなかうまくゆかないものといった感慨でしょうか。

「鄧散木」(1898～1963)は近代中国を代表する、書と篆刻の大家です。清朝から中華民国、国共合作、日中戦争、新中国と怒涛のような変動の時代を、「文人」としての節を断固曲げずに生涯を貫いた稀有な人です。元々上海生まれで上海を拠点に活動していましたが、共産党政権になって、1955年に北京に呼ばれて重要なポストにつきました。

しかしそれも束の間、1957年に「書や篆刻の伝統を護れ」という意見書を上申したことでたちまち「右派」として弾劾され罪をかぶせられました。その後も苦難続きで、左足を切断する、右手が利かなくなる、胃を切除するなどのあげく、1963年に肝臓ガンで波乱の生涯を終えました。

死後12年経った1975年に至り、ようやく「右派」という無実の罪が取り消され、名誉が回復されました。この篆刻の言葉も、こうした彼の生涯を思うとなかなか含蓄の深いものがあります。

彼の著書「篆刻学」は私の座右の書です。(この印の縁の一見奇妙な形は、古代の封泥の形を模して取り入れているものです。)

「遊印遊語」は、第1号から第28号まで連載したコラムで、私の趣味のひとつである「篆刻」の作品をご紹介しました。最近では眼も衰え、気力もなくなり、印刀を手にする事は少なくなりましたが、正月の「賀印」や、頼まれ仕事の「落款印」ぐらいいは彫っています。

鄧散木は権威主義が大嫌いで、中華民国時代も共産党政権になってもまったくその姿勢を変えませんでした。あえて「糞翁」という奇妙な雅号を名乗り、彼の書を求める共産党の幹部が雅号を変えるように命令しても絶対受け入れなかったそうです。まさに“最後の文人”とでも言うべき人でした。



已少帝
老臣好

旅をうたい筆を詠む きゆう “杞憂”をうたう

偶発が引き金となりしは過去あまたロシア機撃墜危ぶみて視る
空爆とテロの連鎖は殺人の連鎖でもあり憎しみもまた
夕食の居間のテレビで見入るなりパリのテロも空爆画像も
中東の街焼く空爆さながらにエゼキエル書の予言のごとくに
欧米露シーア派スンニ派 I S と 卍 に組みあい砂漠に踊る

“民主主義は普遍的価値に非ず”とは
アサドも言うし習近平も言う
すでにもう第3次大戦のさなかなりと
ローマ法王が説いているとは
平和とはいくさといくさの狭間なりと
魯迅が言いしは大正のころ
他にまだイスラエルありイランあり
火種抱えて年改まる

